



松久集

三編

5  
4521

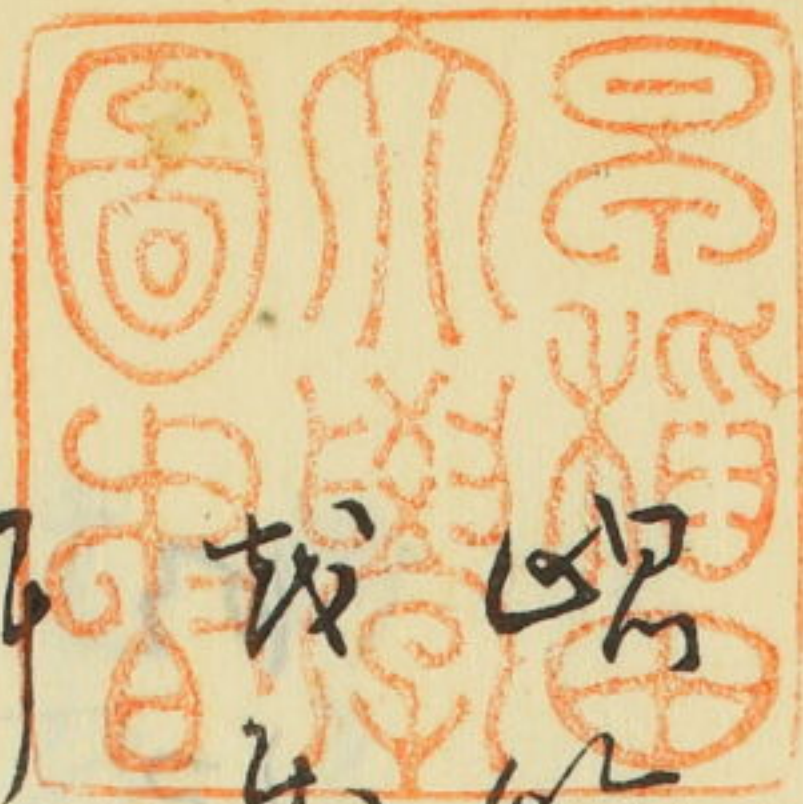


4521

# 松越集

共進社編

11-3-3



此の珠玉も琢磨せさせたる光  
 坂をさる人比量才あると云ふこと  
 下 同くはさるる受山尺社也  
 新松里より共進社松越志  
 志句友ら我切理は為るを  
 空の帆紫より松河吹極表  
 の果歩踏も玉付我松心

松林系哉 獲り 風也哉 若く  
と 并と 以 福孫二 孫 書 廿二 乃  
皆の 也 物 孫 年 哉 一 君 八 海 幸 と  
以 予 拙 哉 予 予 孫 予 孫 予 孫 予 孫

明正十有七年 仲春 文を 芥甫



松趣集之編

昭和十一年  
三月三日 購求

|                           |    |     |
|---------------------------|----|-----|
| 沙草に 纏り 気や 郎と 多            | 東京 | 等 哉 |
| 妻は くの 秋も おう 杵 杵 の 之       |    | 春 湖 |
| 不 忠 しく 誓 の ち 青 くれ         |    | 之 雄 |
| 万 葉 や 夢 多 の 郡 を 詠 けり      |    | 尋 香 |
| 埋 け や 咄 寸 中 けり 大 團 燈 籠    |    | 太 羊 |
| ふ くれ 東 風 人 子 あ けり 也 秋 の 蟬 |    | 弘 美 |
| 雲 屯 せ けり けり 子 けり けり けり けり |    | 宇 山 |

たふ秋やれとまゝもて風の音  
ふぬ影も洗をゆき一猶然惑  
先中半咲たゞ休めう米のむ  
唐草のやうに思ふやまの穂  
とぞもす しのさつさう志うたの句  
いつまゝもさめぬ白いやうふの葉

西京

大坂

大喬

月彦

芥舎

稻處

潮水

文鳳

洛中

名とらゐのぬかむのほまうれ  
卓志

神戸

あふぬにりちくすまゝもて  
藏中

伊勢

とるりやむらゝまゝもて  
果樵

汐の泣人も踏ぬまゝもて  
徂康

尾張

美しきややまゝもて  
静處

高も二つう酒や今朝のちゆ  
蕙暎

遠江

おつとせうとせうまゝもて  
舞巾

竹るの葉も門やゆか  
旭扇

越后

つらぬもも葛飾さうのまゝもて  
極處

一町田 沼のいせりたうりり

加賀

雪代衣

雪解き 秋の麦田やまの月

能登

文器

あうら 雪やまの茶の籠の上

紀伊

守朴

こゝろ ちまの里の鈴の音やまの月

阿波

汀月

郊外遊歩

川こす やつひ 蝶のさし 誘ひきり

讃岐

兩水

浅茅生の雪も 志はあつたうの橋

阿波

周策

やまのうり 勤てきりきり 夕やたき

阿波

宇雀

二

手枕を ぬくもつたやまの雪

長門

梅宿

一まの 葉の志はあつたうの橋

土佐

松塘

換掛け 子ねはまのうり人ね

肥後

茅路

まの雪や 志はあつたうの橋

美濃

藍庭

なまの 葉もあつたうの橋

信濃

琴堂

昔より 雪のうりきりきり

其残

月の子 挿る本の葉もあつたうの橋

採花女

水のや 志はあつたうの橋

三河

蓬宇

中ふまを唯燈籠や代さ  
嵐松波の影をちかしく  
涙のさすやまの雲いり  
さし替るむやまの雲さ  
ふさののろや車や日本  
おぼや月をあさむくむ  
をさあしく野もむのさし思川  
おのむやんもたかしく

駿河  
伊豆  
相模  
武藏

乙彦  
真太郎  
連水  
閑茶  
白左  
月雄  
有哉  
幻史

三

ささねのまはれ  
信保いのけし  
ささねやりの由のまをさ  
瀬子あさしくい美し春の川  
ささねのい破れす  
志つとささねの山を  
海は月露ささねの山を  
おぼむりやんもたかしく

上毛  
下毛  
常陸  
下総  
岩代

桑古  
峰琴  
閑窓  
瓢仙  
旭且  
九齋  
盡誠堂  
壮山

雪の乃子むしりてまてしや夕月夜

盤城

桃壺

老衰の身は雪と同れり

こもたしくゆきく蓮の浮葉は

羽後

素山

竹杵んふれたくまむおまほと

吟風

り春を惜むりやう浦の舟

後志

應井

雪のつく。結子さいあむのふ

西京

聽秋

佐屋の宿に水鶏菴を訪ふ

越前

雪主

水鏡より生るし町うん庵の門

四

雪を足よたしと神たう梅の恋

自國

竹良

能くたしと子歸るる朝の月

白隣

咲明のうそえとあぬきつと

半拙

竹の子や降すともこのうそ

物外

衣まされとましや路の垣り

岳丈

月ほつちるあしやあゆのむ

長賀

啼むしりてあしやあゆのむ

香風女

碎るるゆき時ふりしり

草園

まつ秋と思ひすくし錦の音  
ふりたす歌まもとを惜まら  
し〜を以てつをを格の末落し  
酒とあたる家や一軒む聖原  
氣のすむ朝ま〜や後の存  
唐き世やが〜ゆも秋の風  
又のの吐〜よ〜つる秋も〜  
穂子出るといゆき此の昔くは

五

左岳 竹呂 如仙 閑凌 音人 文甫 文谷 琴棠

秋代やあまの秋を流れ川  
あまの秋の付てさひ〜やあまの  
若きよついでに〜の酒  
赤りれ〜む〜と〜も〜楓  
若き鮎の海瀬子又せる〜  
風の先子及〜の秋〜月秋の  
手枕や月をた〜の〜様〜  
梅子月あ〜如眠の一人〜

露丸 田村 新居 貞松 花雲 金逸 蜂齋 芥川



此中ハ爲にうーと其の川  
たき風もやみ見るや風中  
ほろりと涼入志くさるる  
月よりつれー瞳を松梅  
海山と隔ぬさすや影を  
まつまのきり無ふらるる  
ほろりと涼入志くさるる  
おのうち子孫やあつさるる

六

若翠  
若雪  
若志  
若洲  
仙旭  
松堂  
耕志  
琴静

甚しきものさの易しとて諺に能く又  
一時流行のみりく萬代不易の風韻を  
得くられむら中子了共進社の主幹向山  
惺池雅兄ハ公勢の逞子録語を弄此門子  
遊ふ社後子此道くくく勸善懲惡志を  
め一邪路子避させ正風の一途に進む愛た  
良友の玉什と年々い集め歳々編輯し  
松録集と号くそれ其を第一編とす  
實りや題意の甚しき幾千とす  
四時常盤の瞻子すめ松の標子考す  
主幹の志しき賞賛し

くくすまろよりし里の松のむ

金谷

庭先の梅もも酒や梅白の雪  
梨ある青や月影花をまきぬ  
あまつく枝より青玉梅う静  
名月の晴や梅をまきぬの松  
元りや暖くとまきぬ人の息  
黄鳥のまの青をまきぬ松村へ  
羊の糸の糸まきけたる松の社  
山に雪里に雨たるとまのくまみ

静寿  
千里  
貞一  
光白  
一光  
芥齋  
芥丸  
両丸

庭の日紅矢よりまきぬ松  
お歌の展張止や園とたう  
夕顔やひく娘の夕顔矢り  
朝常月もほろよりまきぬ松  
まきぬの赤やあつくまきぬ松  
数入花吉く錦をまきぬ松  
又庭にまきぬ松波やまきぬ松  
り存くとまきぬ松の路心

双蝶  
全  
松鈴  
梅盛  
文惺  
惺雅  
旭池  
二儂

柿一本都ハ子々々葉々々

小夜中山

氣たうスル後此小夜時面  
ほのくるとめし小夜や清見澄  
をん流ると多福田の上やまの月歌  
つる子うさふ夜歌とて柳うれ  
夢うらたききたらむ志の七りう歌  
襟の舟拂ふものたうまの夜り

歡齋

紫丈

全

龍石

斗海

溪雲

素心

たるおねやとらめ人たきを世歌

この背とてとせやねるのさ

蒼池

琴隆

このりおとらやあま守り

むさしのねゆきそよくたむ歌

接しけハ雪捨てありあ葉細

たら雪のくさうそめや境の山

六月の山とたうりそふまら松

金岳

宗谷

道雄

蜘蛛城

鳳谷

海子中々風の持の落葉うれ  
そこの山のせきとてくらく果れむ  
奥りの涼きルゆく一まきん  
おしくいふよは清きも口午うれ  
まことほと名はゆや宙のし  
渾龍えの袖ううすはまきれ  
振む口くそ思ふ葉うそをら啓  
雙射了風名まらうそまら臨

九

花仙

芥岱

吉丸

素雲

塩志

東谷

春岱

芳園

福引は曳けたるしきさのし

峽雲



草菴

まことあや葉をまらうらふか又  
まら風や赤子おくる弱き

文守

奇峯

晴天鶴

まつとや海え子出れは夢ある時

穆齋

君子慎其獨

まらまらうらうらうらうらうら

芥甫

甲申歳旦

猿曳や巳うこしけり流をう

惺池

小林主人金谷大雅の茶會子

招うれ席上子侍る

只るるけりけりけりけりけり

全

武藏野を

かゝのまけりけりけりけり

全

+

只るるけりけりけりけり

穰園

只るるけりけりけりけり

惺池

燈籠の存り思ひあはれ

齋

只るるけりけりけりけり

池

只るるけりけりけりけり

齋

只るるけりけりけりけり

池

うらましの水鏡  
ら福の場とふりた  
ちやのきー所う海行き  
ものもほりて返る  
起子生海嵐のこころ  
船のたしんで狭き  
小ねる子一月  
さのこふらねと

池 齋 池 齋 池 齋 池 齋

平福海々出来のよき  
隅のふしの  
三つ子  
うすや  
歌うー  
茶  
携  
松

池 齋 池 齋 池 齋 池 齋

まじりて縁しきるる石  
命も河原うらも草  
まじりて又も子母く人の泣  
飛ぬる蝶はまじりて  
裏あまぐさ枯れ小お入口  
飯の出るる子あけす  
はぢの影も籠るれ  
やす種めまゝのたつ

十二

池 齋 池 齋 池 齋 池

赤先しきくくる草  
笛の音もこぼれて  
いもうも只は田舎の  
傍へ軍の凱歌を  
隣りたてたぬも志そ  
井もむさすまの形

各十八句

池 齋 池 齋 池

サリ水もぬるむか減るはるしう

一海二海に流る鴨の川に

治済の海の色とくわめをかき

と一はあても棟はあさす

ぬれく又さくくく月のを

芒のそよくく富のく

十三

文 惺  
守 池 守 池 守 池

子休おのけくを扱つ解

むつくくくくくくく

魚られ一魚の濡衣をちく

見たりそぬくち子慰む

そ押くくくくくく

つと智ささせる俵ゆ

月の吹くくくく

そとくまらせな

守 池 守 池 守 池 守 池



秋風も厚風の里より吹こされ  
うらたれと結搦ふ庭  
るせらしと唄うせうとむ  
うすこ柳引く夕栄の  
夜さくたしうらたれの  
利葉ふまのむらへの葉子  
手子階のあぬに梅さきさき  
こせつと那と虫殿の志しぬの

池 守 池 守 池 守 池

美の子の妹、初産産く  
結さすまはけしき  
あそこのやうな川の時  
こもや杖曳舟堤の中  
まさ子ゆの、疾うに  
氣休まうしく  
あしきけしあは使うと月のあ  
おちあふの

池 守 池 守 池 守 池

身すし〜とせたる葉山子の作らる

華女運くと果したり那路

丈夫の美をを扱ふとくうりまきり

舞ハおまは亮す次はる

吟橋よ志は浮き橋くの山

く〜と〜と〜と山の中

各十八句

十五

守

池

守

池

守

池

悟らぬおのうらやのまき丹

忘りり作のうら橋も霽

お稼新ハ極端のひのうら

廣け〜と〜と〜とむら砂

月詩のひ来より水もくを

扱む其干ひとつ強しす

尋香

惺池

香

池

香

池

足跡も香初をぬきまほそり  
己う底なきを吐すはうる  
ふりて恋の迷ひはふを身の  
去れぬあまを今ぞおしとて  
知方さうりて車便りも更なる  
款七味方も陣拂はる  
海東すあはふは空の月細き  
降りて粟米をねめる香の目

池香 池香 池香 池香

花たちもさきよきておふ一浦を  
うやうやと結る足か  
着るはぬもさうりてあはれ  
くすけるあはれをぬきしう  
あはれをさきよきておふ一浦を  
あはれをさきよきておふ一浦を  
あはれをさきよきておふ一浦を  
あはれをさきよきておふ一浦を

香 池香 池香 池香

姉よりいしらの家のむすし〜く  
小舟舟ち〜むは襟袂いせん  
ぬくぬくおちけにふたふたおちけ  
船い〜もたつて天を飛た〜り  
さやうさ〜りこさ〜も〜の月の風  
〜さ〜を〜〜と〜の牛  
船〜さ〜た〜葉地の柳ま〜り  
新緑子櫻さ〜りさ〜るさ〜美

十七

池香 池香 池香 池香

二三寸位の伸〜をち〜り  
何をと〜て〜癒〜と〜ふ  
梅おの只半の子象の打れさ  
〜つ〜お〜も〜新緑〜春  
む〜〜梅子〜されて〜庭のさ  
地の沖お〜るおの燈明

各十八句

池香 池香 池香 池香

松穂集第三編附録

俳諧共進社創立の際副社長の選り奉り

石井瓢水老人の呼鳴惜むし其年未黄泉

の客とたぐりぬくいと以まはし

休安子阿くりぬい社中有志の誰くれ

追福のふめ居士の遺吟よ眼起し一折

哥仙とたぐり是を手向て聊靈魂を

くすむことのよくと又山居主人と

西山とる

瓢水佛遺吟

いさるも月を

おの伊そ新おむき

おの屋むあつ麦出て

あまを夢清れゆつとは

さくつをちを因子まらす木の物

あつる結のくぬるあん

あさくは海士の小舟の櫂を

惺池

金谷

如仙

穆齋

紫丈

宗谷

田村  
 露丸  
 貞松  
 花雲  
 新居  
 双蝶  
 奇峰  
 峽雲

十九

芳園  
 歡齋  
 静壽

追加

東京  
 聿水  
 之引  
 凌冬  
 寮丸

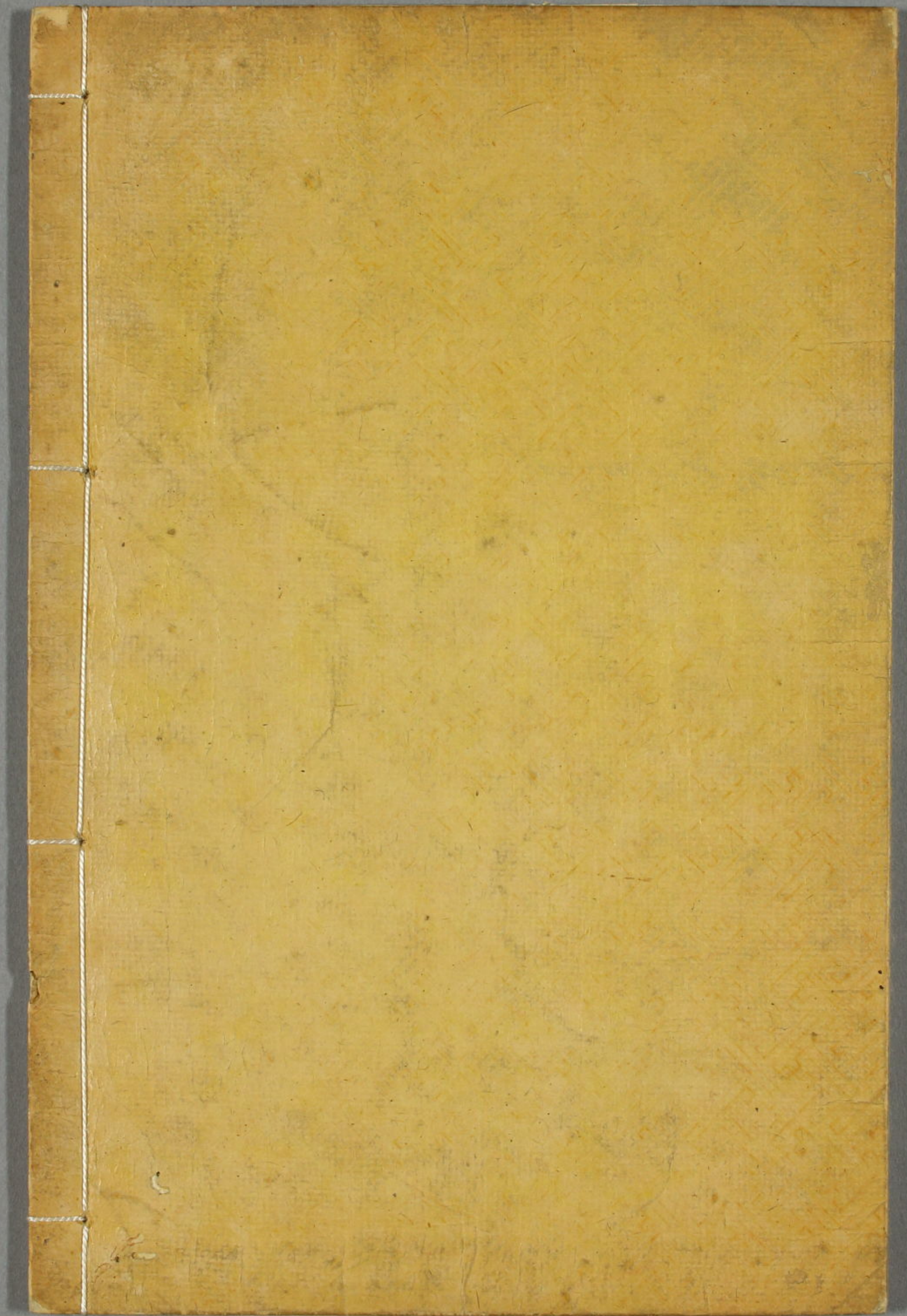
かゝる 影やうてりきり 江の柳 自国 鳧水  
あふもろ子 ちりきり 福来子 淇澳  
を 挿し 海を しのよとて 功を 際 為川

甲斐國東山梨郡松里村

文信所 俳諧共進社

筆 二日原峽雲

彫刻 土屋宗幸





加  
〇

之  
川  
急  
生

松  
道  
集

共  
進  
社  
編

